慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	コケトリーの鏡、もしくは17世紀の風俗喜劇
Sub Title	Le Miroir de la coquetterie, ou les comédies de mœurs au XVIIe siècle
Author	片木, 智年(Katagi, Tomotoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2011
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.101, No.2 (2011. 12) ,p.182(75)- 194(63)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	牛場暁夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01010002-0194

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コケトリーの鏡、もしくは17世紀の風俗喜劇

片木　智年

日本語にも入っているフランス語で、「コケット（coquette）」という女性形の言葉がある。「コケットな（あるいは英語でコケティッシュな）魅力の女優」などという表現で使われるが、清純な感じはしないし、貞淑な響きでもない。むしろ、上目遣いに男を誘っているようなイメージの言葉である。

実はこのフランス語、それほど昔からあるものではなく、初期の用例（1611）では、「おしゃべり女、下ネタおばちゃん」程度の意味だったという[1]。ところが、その70年後、1680年のリシュレの辞書では次のように説明されている。「悪い意味で使われる。言い寄ってくる色男たちの目の前で、自分を飾ることを好む。甘い言葉をかけられるのを好む(…)」。リシュレは、しばしば引用元を明示して、用例を示すが、サラザンの詩からこんなものまで引かれている。「彼女はパリの女性だ。これはまっとうなフランス語ではコケットと呼ばれる」[2]。一方、1690年のフュルティエールでは「男に愛を誓わせようとするが、自分のほうからは、約束することはない」[3]と説明される。17世紀を通して、意味がどんどん発展していったのだと思われる。

「コケット」の誕生

さて、この時代、理想的社交人を形容する「オネットム」ならず『オネットな女性』[4]を書いて大当たりをとったデュ・ボスクという僧がいる。初版

(1632) では姿をひそめる「コケット」に、第3部 (1636) で新たな一章をもうけている。デュ・ボスク自身、「コケットに最初に戦いを挑んだのはわたしではないが、公然と宣戦布告したのは自分」と言っており、そんなところを見ると、1630年代くらいから、世間の厳しい目がコケットに対して向けられ始めていたことが分かる。

デュ・ボスクは「コケット」糾弾の戦略として、この本で読者に「鏡」を示すのだとする。そこに映しだされた姿を見ることによって、「自分自身の欠陥について熟考することができる」[5]と言っている。この時期のフランス語の「鏡＝モデル・お手本」という意味と、自らの姿を映し出す姿見という意味を重ね合わせた表現である。一方で、鏡として「コケット」を描き出す以上、必然的に、カリカチュア化、モデル化がなされることになる。そういう意味でも、「コケット」が社会的タイプとして、定着するのに、このベストセラーが少なからず貢献したということだろう。

さて、まだこの言葉が注目を浴び始めてほやほやの時期、デュ・ボスクにとって、「コケット」の本質は affetterie と呼ぶものである[6]。今日では使われない言葉だが、著者の用法を見ると、17世紀的意味での naïveté[7]、つまり「自然で飾らない態度」の対極にあるらしい。現代フランス語の affectation に近い意味で使っていると思われる。一方で、適切な教育を女性に与えることは、「表情に表れる実直さ」[8]につながり、要求される「羞恥心は外見でなく意図や考え」[9]に結びつき、「コケット」への道から、女性を救い出してくれるはずなのである。Affetterie は、従って教育の失敗から生まれる。不誠実やずうずうしさ、派手さといったモラル的な意味も含蓄していたのだろう。

著者はまた、モードに走ることにも「コケット」の本質的特徴を見ているようだ。「手袋」「付け黒子」「えり」「新たな香水」「リボン」、「モードが生まれたかと思うと、それはもう時代遅れである」。「こんな生活をすることはコケットとして生きることではないか」と嘆息するのである[10]。そして、重要なことだが、男の気を引いたり、口説かれるのが好きといった、いわば恋愛体質は、デュ・ボスクでは、はっきりと認めることができない[11]。

デュ・ボスクは「コケット」について3つのタイプを挙げてみせる。「身分をひけらかしすぎるコケット」、「美しさをひけらかしすぎるコケット」、「学や弁の立つことをひけらかしすぎるコケット」[12]。ここでも、言葉が恋愛体質的に使われているわけではない。衆目の前で、必要以上に自分を認めさせたい、賞賛されたいという今日で言う社会的「承認願望」が問題になっている。

これについては後で論ずることになるが、伝統的な女性批判の紋切り型であった女性の「空＝虚栄（vanitas）」が17世紀になって、新たな視点と表現で扱われ始め、「コケット」という言葉を通して定着していったのではないか。

グルナイユと「コケット」

グルナイユもその淑女論、『オネットな娘』[13]で、この新参者、「コケット」を大いに糾弾している。

「コケット」が「女学者（sçavantes）」という言葉と組み合わされるのが、1640年のこの著作第3部の特徴である[14]。この二つの性質をいったん娘が兼ね備えてしまえば、やっかいだというのであろうか[15]。

とはいえ、「女学者」の問題を先んじて論じたデュ・ボスクは、女性を無知の状態に置くことには反対である。むしろ、女性の学問を奨励し、彼の使う sçavante という形容にはグルナイユや後のモリエールの皮肉な意味は認められない。デュ・ボスクはこう言っている。「スコットランド王女・イザベルが全く教育を受けたことがないと知ったとき、大変な恋心を抱いたブルターニュ公フランソワの過ちに思いをはせると失笑してしまう」[16]。言うまでもない。すぐに思い出されるのは、4歳の幼女を見初め、理想の妻とするために修道院でできるだけ無知に育てようとした『女房学校』[17]のアルノルフである。「神さまにお祈りして、俺を愛して、針仕事や糸紡ぎができればじゅうぶんだ」（I－1）。この台詞にも、デュ・ボスクは失笑したことであろう。『女房学校』の核心的テーマを思わせる次のようなことも言っている。

「女性の無知は大きな利点だというものたちは、田舎の世間知らずの純朴さを過大評価してないか？　こうした女性が適当な機会や、しつこく言い寄ってくる男を見つけると、そんなものは普通、大きな危険に晒されるのである」[18]。当時の社交界・サロン等での似たような議論をネタにしたのであろうが、デュ・ボスクの著作の直接・間接の影響で、アルノルフのキャラクター作りがされたのではないかとさえ推察したくなるくだりである。

一方で、グルナイユは普通の女性が sçavante になることについて、批判的である。例えば全ての読書が有益なわけではない（この点ではデュ・ボスクも小説や芝居に女性が触れることについては反対の立場である）。そして残念なことに、「真面目な著者を毛嫌いすることはコケットの特徴」[19]なのである。問題のある読書で知識を得た結果[20]、こんなことを言い出すというのだ。「娘はあなたに、どういう道をたどって恋する男が女性を手に入れたか説明するだろう。人影さえも怪しいような場所でどうやって恋文を手渡すかを説明するだろう。そんな手紙を受け取ったことがあると示し、自分の方でも手紙を送る術をよく知っていると示しているのである。さらに、娘は、奉仕してくれる男に従うために父親に対して行った抵抗の数々や、[男たちが]コケットな娘を手に入れるために沢山の血を流して行った戦いについて、延々と語ることだろう」[21]。どうやらデュ・ボスクには表われない恋愛的性質が、「コケット」の特性に付与されたようである。

ここでも、すぐに思い出されるのは、モリエール『才女気取り』である。「お見合い」を終えたカトスとマドロンが、いきなり結婚の話をするなんて、「小説を最後から読む」ようなものだと憤慨し、そうあるべき恋愛から結婚へのプロセスを語ってみせるシーンは有名である。同時代の恋愛小説の典型的プロットに従って、夢物語は繰り広げられる。娘や姪の縁談をまとめてやろうとしたゴルジビュスには何を言っているのかさっぱり理解できない。おまけにこの二人、カトスとマドロンなどという俗な名前は気にくわない。小説のヒロインのような名前で呼んでくれとゴルジビュスに言い出す始末であった（I－4）。

ところで、この二人、『滑稽なプレシューズ』(*Les Précieuses ridicules*)というタイトルにもかかわらず、実はお見合い相手には「コケットとプレシューズのごった煮」(I－1)とののしられている。「プレシューズの邪気がパリを汚染しただけでなく、田舎にまで広がっている」(I－1)と嘆く台詞の直後だけに、なぜ、モリエールが娘たちのことを「プレシューズ」とだけ形容しなかったのかが、疑問に思われる[22]。二点ほど、考えられる答えを挙げてみよう。

まず、ここでモリエールが使う「コケット」とは、デュ・ボスクが強調し、グルナイユも踏襲した affetterie「過度の装い」ではないかという点。身のこなし、ファッション、更にはお上品な言葉使いが板についていないという意味で、二人の娘はひどく人工的で、不誠実な印象、つまり「プレシューズ」であると同時に「コケット」な印象を与えていたと解釈するべきであろう。

同時に「時間を聞かれたり」「あくびをされたり」してひどい目にあったことに関して「コケット」という非難が可能なのは、「彼女たちは自分を誉めそやしてくれ、芝居の筋や小説、イギリスのリボンの話しに明け暮れるまともではない者たちとの会話しか好まない。けっしてオネットムとの会話がお気に召すことはない。というのもオネットムはコケットたちのバカさ加減にちやほやと付き合いはしない」[23]とされた「コケット」の特性を、台詞を言ったラ・グランジュも、それを聞いている観客も了解していたからではないか[24]。

さて、1660年代には男とのかけひきを通し、様々な作品で明白に描かれるようになる「コケット」の恋愛体質についてだが、1654年のドビニャック師『コケットたちの王国』[25]で、正面から扱われている(先の注2で言及したように、サラザンの詩もほぼ同時代に、パリという街自体の「コケット」な風潮、軽薄な恋愛体質の蔓延を嘆いている)。

ドビニャック師によると、この国は、「自分が作ったわけでもない子を亭主が育てる」ひどい浮気王国で、「羞恥心や慎み、節度」は存在しない[26]。「プレシューズ」も含めていろんなタイプの「コケット」がいるが、その中

には「聖人」と呼ばれるものさえもいる。「皆の前では拒絶するくせに、二人になればすべてを出し惜しみしない」[27]聖ニ・トゥーシュである。しかしながら、「コケ」（コケットの男性版軟派男）から最ももてはやされるのは「不釣合に結婚した女」であり、「魅力や身を飾ることに欠けるわけではなく、老人や困った人物や間抜けのもとで永遠に、そして不当に耐えなければならない［……］若い美女」[28]である。

また、この国に教会がないわけではない。が、人々がそこに出かけていくのは、「神様にお祈りするためではなく、見るため、そして見られるため、からかったり、微笑を投げたり、甘言を弄しあうためである」[29]。このくだり、実は伝統的な劇場批判と同じ表現で描かれている。『演劇のプラティック』を著したドビニャック師の面目躍如といったところであろう。同時代の演劇批判は、単に戯曲の内容に向けられたわけではなく、劇場内の観客の男女が、自らを「見せ、見られる」と同時に、舞台上で演じられる情念の表現が、劇場空間にも反響するという劇場空間批判でもであった。『コケットたちの王国』では、聖なる教会内までが、情念の交錯する劇場と化してしまうという嘆きなのである[30]。

さて、この「コケット」、1660年代を契機にして、文学作品や舞台に頻繁に登場することになる 。モリエールの代表的コケットは『人間嫌い』（1666）のセリメーヌであろうが、「コケット」という言葉をタイトルに含んだ作品だけでも、ぞくぞくと登場することになるのである。デュ・ボスクやグルナイユは、1630年代に社会的タイプとして「コケット」を認知させ、イメージの定着に寄与した。それを踏み台として、ドビニャック師が『コケットたちの王国』を出版し、サラザンやその友人が活躍した1650年代に、文学的表象や演劇における「コケット」がキャラクター化し、定着したのではないか。演劇や文学が、「ホラ吹き弱虫隊長」や「恋する老人」といったしばしばコメディア・デラルテ由来のコミカル・タイプを定着させたように、現実の女性、社会の実情とは必ずしも一致しない「コケット」というコミカル・タイプが成立したのである。この原型に1660年代以降、様々な作者、様々な役者がそれぞれの味付けをしていくことになる。

***

社会的タイプに練り上げられた初期の「コケット」は、伝統的な女性批判に使われるvanitasの特徴を引き継ぎ、そこから生まれたのではないかという仮説を先に述べた。例えば、16世紀に著された『女の不完全さと悪意のアルファベット』[31]を見てみよう。この時代での代表的女性批判書のレファレンスであり、何百年にもわたって、版を重ねてきたベストセラーである。

女性の「欠陥」「性根の悪さ」をアルファベット順に分類しているが、Vの項目、VANITAS VANITATUMが真骨頂であろう。言うまでもなくウルガタ版ラテン語聖書で、現世の無常を述べた表現。日本では文語訳旧約聖書にならって「空の空」といわれている。つまり「虚栄の虚栄」である。女性とは「本質的な虚栄と習慣的な虚栄」[32]でできた実に空しい被造物だということだ。

「『空＝虚栄』ゆえに女性はちやほやされたり、お世辞でくすぐられるのが好きである。生来の本能で、見せかけや偽善、隠蔽や良い顔をつくろうがために、持ちうる限り最も高貴な性質のひとつである誠実さや実直さを軽視するほどである」[33]。また、この「空＝虚栄」ゆえに、女性は「人を軽んじ」、「高慢」、「好奇心・物欲に満たされ」、「他者の賞賛を求めようとする」[34]。「着飾り」、「世俗を求め」、「しなを作り」[35]「鏡をわきに」[36]細々した装飾にこだわりつづけるのも、このためだというのである。「コケット」という命名で新たな社会的タイプを作り上げるにあたって、デュ・ボスクが、vanitasを巡る「嫌女」伝統 を参照し、受け継いだのは明らかだろう。しかし、デュ・ボスクの視点はここまで悲観的ではない。なぜなら、女性が「コケット」に至る道から、教育によって救い出せる可能性を大いに強調しているからである。「本質的虚栄」は、その是非も含めてさておき、「習慣的虚栄」からは矯正可能という視点を持ち込んだのである。

さて『女の不完全さと悪意のアルファベット』も認めるように、男であっ

ても、身を飾りもするし、「虚栄心」もある。が、女性のケースが許し難いのは、「不純な悦楽の奴隷にえさを見せ、引き寄せるために」[37]その虚栄があるからだという。本来、男側の問題、性と罪、肉の誘惑と魂の救済を巡る自身の葛藤の責任を、女性に押しつけ、それを vanitas として切り捨てているわけである。

この点においても、女性に対し新たな視線が向けられたことがわかる。「空＝虚栄」から「コケット」へと呼称が変わるとき、女性に与えられた価値も変容する。もはや女性は、単なる性的存在、心や教養を持つ以前の「メス」ではない。男の暴力的な性愛の対象としての存在ではなく「サタンの誘惑」でもなく「人生の難破」でもないのである。持参金と子どもを産む機能で評価された存在から、自らを心と教養を持ち、社交空間で、男性との新たな関係を模索する存在、「承認」を求める存在となったのである。ところがその教育のあり方、教養の方向性が誤りと判断されたときに「コケット」というカリカチュア化を施され、出る杭のように打たれてしまったのである。

その意味からも、大いに問題視されたのは、女性が小説を読むことや観劇であった。彼女たちが教育を受け、知の遺産に触れ、小説や芝居に描かれた感情の世界に触れることによって、メディア世界に描かれた心のゲーム、恋愛を楽しもうとする存在に変わったと解釈されたのである。結果、vanitas は、「コケット」を生み出したという構図が想定できるのである。実際、小説や芝居のせいで、頭がおかしくなってしまった娘のカリカチュアは、モリエール以前にも流行する。注目すべきは1637年のデマレによる『妄想狂たち』[38]であろう。小説の主人公にしか恋ができなくなったメリス、芝居狂いのために、結婚を拒むセスティアーヌ、男は皆自分を愛していると思い込むエスペリ（いうまでもなく、『女学者』ベリーズの先祖である）、奇妙な三人姉妹が舞台に乗せられる。デマレ自身、この作品の序にこう書いている。「自分を見つめる男や、自分についての話に耳を傾ける男が、皆自分を愛していると信じこむ次女の気質の娘たちほどよく見られるものはない。おそらくそれほど素直に自分の思っていることを口に出しはしない

が」。デュ・ボスクとグルナイユの間に現れたこの作品が同時代の「コケット」像形成において果たした役割は大きいと思われる。

そう考えると、コケットな娘を美徳に満ちた芝居の鑑賞によって、あえて矯正しようというドリモンの芝居は戦略的で面白いし[39]、1690年には『コケットたちの夏』[40]で表層的な恋愛体質をはるかに超えたヒロイン、アンジェリックが現れるのも興味深いことであろう。この娘、自分に言い寄る様々な男たちを軽くあしらい、恋人クリタンドルに関しても、あやうく結婚してしまうところだったと反省こそすれ、それ以上深入りする様子を見せない。「男に愛を誓わせようとするが、自分のほうからは、約束することはない」と、新しい説明を「コケット」に付け加えたフュルティエール的ヒロインである（フュルティエール大辞典刊行も1690年）。この娘、同時に、こんなことも言っている（I－1）。

リゼット

彼のことを愛しているかどうか、お分かりにならないと？

アンジェリック

ええ、私、誰のことも愛してないみたい。

リゼット

あら大変。世間の声は間違ってますね。

アンジェリック

なんですって？

リゼット

世間はあなたのことを誰かれかまわず愛する人だと。

アンジェリック

それは違うわ。ほんとに誰のことも愛してないの。でも愛されるのは好き。私のおかしなところね。同意するわ。

リゼット

綺麗な女性みんなの変なところですね。でも、あなたは、その中でも特別扱いに値しますよ。

アンジェリック

あら、でも私、コケットじゃないのよ。私のやってることはみんな、単に好奇心から来ることなの。

リゼット

好奇心！

アンジェリック

ええ、私、才気や美が人の心の中に生み出しうる色々な効果を知るのが好きなの。

いやなんとも……絶句というところか。恋愛や結婚の関係性を超えて、女性の魅力とは何か、なぜ男はそんなものに右往左往するのか、それ自体を見つめ直そうという、「コケトリー」を超越した新たな女性像が提示されているのである。わずか60年ほどの間に、「コケット」が到達し得た新しいヒロイン像である。

註

1 *Dictionnaire historique de la langue française,* sous la direction d'Alain Rey, Le Robert, 1993.

2 Sarasin, *Les Stances à Monsieur de Charleval* からの用例。*Dictionnaire françois* / par P. Richelet, — Tokyo：France Tosho Reprints , 1969.「彼女は女性で、パリの女性である以上、まっとうなフランス語ではコケットと呼ばれる」。この詩は Avigdor (Eva), *Coquettes et Précieuses*：*textes inédits*, — Paris：Nizet, 1982, p.26が引用して、自身の校訂する作者不詳のテキストとの関係を論じている。コケ Coquet とコケット Coquette が、下僕に至るまで恋愛遊戯のように騙し合うパリの風潮を風刺しているが、1654年に亡くなっているサラザンの遺稿の一つであり、同年に印刷されたドビニャック師のテクストとほぼ同時代であると思われる。後述するが、1650年代に顕著になる「コケット」の変容と呼応する。*Les Œuvres de Monsieur Sarasin*, — Paris, 1656, Google eBook, Original from the Bavarian State Library, Digitized Dec 17, 2010, p.441を見よ。

3 *Le Dictionnaire universel* / d'Antoine Furetière, — Genève：Slatkine

Reprints, 1970.

4 Du Boscq, *L'Honneste femme*, I − III, 1632–36 (T.I. 1re éd. 1632, 2e éd. 1633 avec préface de N.P. d'Ablancourt et O.Patru, T.II 1633, T.III 1636.

5 Du Boscq, *op.cit.*, Troisième partie, 1636, p.103.

6 Affetterie というキー概念を使って、「コケット」がまな板に載せられるのは1636年の第3巻だが、1634年の第2巻にはまだこんなくだりがある。「理性というよりは体液（気質）によって生きようとするコケットと暮らすのにどんな喜びがあるというのか。妻が夫を支配していたスパルタの慣わしを復活させようとするコケットと」p.288.

7 Du Boscq, *op.cit.*, Troisième partie, 1636, p.92.

8 *Ibid.*

9 *Ibid.* p.93.

10 *Ibid.*, pp. 122–123.

11 ソレルが『とんでもない牧人』(1627) ですでに、「コケット」に恋愛体質を見ているだけに興味深い。「最初の純真さが大変な affeterie に変わってしまった」若いジュネーヴルは、「コケットの女王」であり、歩き方や言葉使いにまで至る“しな”で男たちの気をひこうとする。Affeterie がコケトリーの本質であるという考え方は、デュ・ボスク同様であるが（娘の態度が「耐えがたい Vanité」と形容されていることも注目に値する）、それが有利な結婚を狙うため、男の気をひこうとすることにつながるのである。更には「彼女を一目見た男はみな、自分に死ぬほど恋をすると思い込み」、教会でも縁日でも、目立とうとするが、逆に失笑すら浴びたという（Charles Sorel, *Le Berger extravagant*, précédé d'une introduction de Hervé D. Bechade, —Genève : Slatkine Reprints, 1972, pp.64-65）。デュ・ボスクが言及するうちで、強いて言うなら、ネロンとポッペアの例がこれに近い。が、ここでもポッペアの様々な虚飾が強調され、そしてその目的もネロンの気を引くため、愛を得るためというよりは、オクタヴィアから寵愛を奪う目的だったという。女同士の確執がコケトリーに走らせたというのである（*Ibid.*, pp.103–105）。

12 *Ibid.*, pp.138 − 139.

13 Grenaille (François de), *L'Honneste Fille*, –III, 1639–1640.

14 いうまでもなく、後のモリエールの『女学者』*Les Femmes sçavantes* を予告するものである。

15 Grenaille, *op.cit.*, Troisième partie, 1640. Caractere des Coquettes sçavantes, pp.25–27.

16 Du Boscq, *op.cit.*, 2e édition, 1633, p.255.

17 モリエールの引用については Molière, *Œuvres complètes*, I, textes établis,

présentés et annotés par Georges Couton, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1971.

18 Du Boscq, *op.cit.*, 2e édition, 1633, p.258.

19 Grenaille, *op.cit.*, Troisième partie, p.230.

20 グルナイユの挙げる例では、たとえばタッソーの『解放されたエルサレム』、英雄的騎士物語だが、魔物や恋愛、女騎士も登場する。当時のフランスでも大変な人気であったようだ。

21 Grenaille, *op.cit.*, Troisième partie, p.27

22 「プレシューズ」の歴史の観点から、デュ・ボスクやグルナイユのテキストを検討したティメルマンの近年の研究がある。デュ・ボスクの「コケット・デスプリ（d'esprit）」やグルナイユの「コケット・サヴァント」が、当時の社会では女性にとって余計と思われる知を、不適切な形でひけらかすとされることに注目し、そこに「プレシューズ」のプロトタイプを見ている。が、一方で「プレシューズを特徴付けているおすましぶりや性愛（amour）の拒否が見られず、結局のところこういったコケットたちは単なる女学者」なのだという。本稿では「コケット」を「プレシューズ」とも、モリエールに見られるような「ファム・サヴァント」とも別の社会的タイプとして考察したい。Timmermans (Linda), « Une ancêtre de la précieuse : La « Coquette d'esprit » (1636) ou « Coquette Savante » (1640) », *XVIIe siècle*, N.167. Avril–Juin, 1990. なお、1660年代以降のコケットについては、日本でも赤木氏の示唆に富む著書がある。赤木富美子『フランス演劇から見た女性の世紀』大阪大学出版会、1996。

23 Du Boscq, *op.cit.*, Troisième partie, 1636, pp.140–141.

24 支離滅裂な「才人」マスカリーユを送り込んだのは「コケット」の特性から言って、正しかったのである。

25 Aubignac (F.H. abbé d'), « Histoire du temps ou relation du royaume de coqueterie », in *Le dernier Voyage des Hollandais aux Indes du Levant*. —Paris, 1654. Réédité in *Voyages imaginaires*. —Amsterdam, Paris, 1788.

26 *Ibid.*, pp.68–69.

27 *Ibid.*, p.34.

28 *Ibid.*, p.35.

29 *Ibid.*, p.71.

30 拙稿 Katagi (Tomotoshi), "Querelles du théâtre et espace de sociabilité au XVIIe siècle", *The Geibun-Kenkyu* 75,pp. (270) – (285), 1998.

31 OLIVIER Jacques, *L'Alphabet de l'imperfection et malice des femmes*, —Lyon, 1628, Google eBook, Original from the Bavarian State Library,

Digitized Mar 20, 2009. なおこの本と「嫌女」伝統については、拙稿「引退後に読む『嫌女文学』」(『三色旗』2011、5月号、慶應義塾大学通信教育部) に依拠し、本稿で発展させた。

32 *Ibid.*, p.257.

33 *Ibid.*, p.258.

34 *Ibid.*

35 *Ibid.*, p.259

36 *Ibid.*, p.262.

37 *Ibid.*, p.262.

38 Desmarets de Saint-Sorlain, *Les Visionnaires*, texte de la première édition (1637), publié avec une introduction et des notes par H. Gaston Hall, Société des Textes Français Modernes, 1995.

39 Dorimond, *La Comédie de la comédie*, 1662. SII.「娘がとてもコケットなものだから、恐れてるの ／ 攻囲された街は結局、降服してしまうんじゃないかしら ／ 見せてあげたいのよ、[お芝居に連れて行って] どれだけ熱心に ／ 思慮深い娘が貞節に気を配らねばならないかを」

40 Dancourt, *L'Eté des coquettes*, 1690, in *Théâtre du XVIIe siècle III, textes choisis, établis, présentés et annotés par Jacques Truchet et André Blanc*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1992.